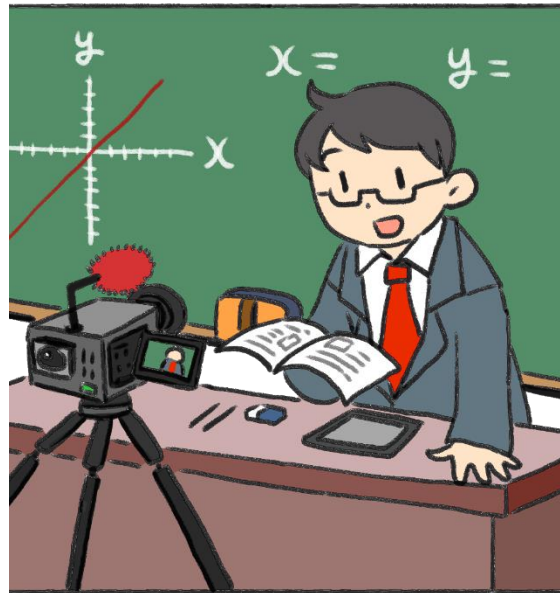
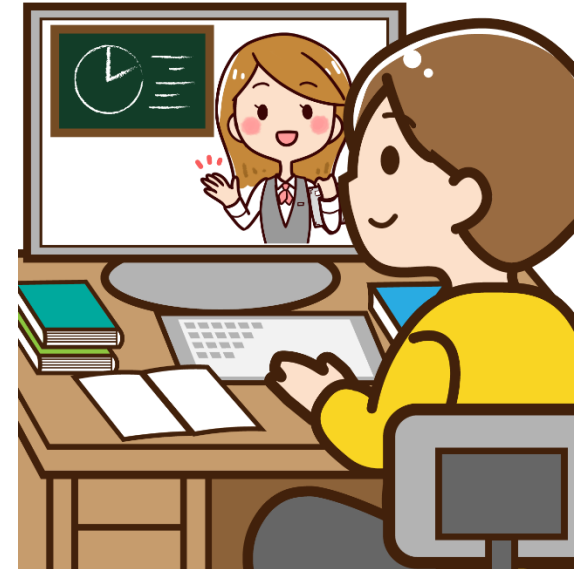




フェーズ0.x



フェーズ1.x



フェーズ2.x

## 2. パネル討議—学校休業下の実践・取組 の報告を読む (1) EVRIフェーズからみると

大坂遊, 川口広美, 三好美織

# I. 「EVRIフェーズ」の定義の確認

Q.現在おかれているオンライン教育の状況は？

1. 自宅や学校に高速・大容量のインターネット通信環境が整備されており、子どもと教職員はいつでも制限なく自由にインターネットが利用できる
2. PCやタブレット端末などのICT機器が全ての教員と子どもに配布（あるいは私物を使用許可）されており、学校や家庭でそれを活用できる環境が整備されている
3. 教育活動においてICT機器やインターネットのコンテンツの利活用を進めており、教員も子どももICT機器の操作やWebコンテンツへのアクセス・閲覧等に慣れており抵抗がない
4. 学校がG SuiteやTeams, Classiといった教育プラットフォームと契約しており、資料の提供や子どもへの連絡, 学習課題の提出やフィードバックなどをオンライン上で実施できる
5. ICT機器や教育プラットフォームを活用したオンライン教育をすでに部分的にでも実施している, あるいは実施に向けた研修やマニュアル化が進められている

どれも「バッチリ！」  
だという学校は…

フェーズ  
2.x

- すぐにも全面オンライン教育に移行できるインフラ環境
- その中で、どうしたらより良い授業を作るか？を模索したい



「まあまあ」が多い  
かなという学校は…

フェーズ  
1.x

- オンライン教育ができる環境はあるけど、やり方がわからない
- まずは、教員も子どもも無理なくできるオンライン教育を考えたい



「まだまだ…」が  
多いという学校は…

フェーズ  
0.x

- インフラやノウハウが整っておらず
- オンライン教育は実施不可能
- 赤ペン先生でいかに子どもの学習機会を補償できるかを考えたい



# “十全な”オンライン教育（フェーズ2.x）に必要なもの

1. 高速インターネット通信が整備された環境
2. ICT機器が配布され、活用できる環境
3. ICT機器操作やWebに習熟した環境
4. 教育プラットフォームが提供された環境
5. オンライン教育の経験の蓄積と共有化



最低でも**すべての教職員（学校）と子ども（家庭）に1～4の環境が保証**されていなければ、オンライン教育（フェーズ1.x～）には移行できません。

一部の教職員・子どもしかICT機器・ネット環境が利用できない状態

フェーズ0.x

紙での課題提供（郵送等）とフィードバック  
部分的なWebの活用

ICT機器・ネット環境は整備されるが十分には活用できない状態

フェーズ1.x

学習動画等の配信  
Webで資料等の共有  
一部授業・HR活動等のオンライン実施  
電子掲示板の活用

オンライン上で対面学習と同等以上の十全な教育を実施できる状態

フェーズ2.x

同時双方向型授業実施  
課題や作品の共同制作  
授業録画記録の参照  
オンライン上での課題の配信とフィードバック  
ポートフォリオの電子化

?

## 2. フェーズごとの人数と学校段階

フェーズ		人数・学校段階
0.x	0.x	6名 (小:2 中:4 高:0)
	0→1	4名 (小:0 中:0 高:4)
1.x	1.x	
	1→2	3名 (小:0 中:0 高:3)
2.x	2.x	

元々からオンラインでの設備や浸透していた学校なし  
小・中学校と高校ではオンライン対応に違いがある  
各フェーズにおけるグラデーション(移行段階)の存在

# 検討方法

- (1) シートごとに番号をつける
- (2) 番号ごとに, ①フェーズ, ②課題, ③乗り越え方, ④効果&意義, ⑤残された課題の観点で整理
- (3) フェーズ毎・フェーズ間で比較検討し, 特質を抽出

番号	フェーズ	課題	乗り越え方	効果・意義	残された課題
1	0	遠隔での学習活動の充実 教育課程の再編成 子ども集団, 教師-子ども関係	学習プリント・教科通信の作成	・遠隔で行った内容と教育課程が連動できたこと ・学校以外の場と学校との連動について考えるきっかけになった	遠隔学習における児童の学習の差をどのように引き上げていくことができるか
3	0	・無目的なプリント学習に対する児童の不満 ・教育委員会主導ではなく, 学校主導で指導計画を練り直す ・学校を中心に指導計画を考えたいという教員の気持ち(家庭学習と授業との連動への意識が薄い)	・教頭・主幹教諭ベースで家庭学習課題のモデルを作成: 学校でできることと過程でできることを分ける	・「授業」概念の見直し	

# 3. 各フェーズの課題と乗り越え方の特色

## フェーズ0.xで試行錯誤（6名）

- (1) 教師-子ども, 子ども-子どもの関係作りの難しさ
- (2) 子どもの学習習慣が身に付いていない
- (3) 学校空間・対面中心で授業を構想してきた教師自身の意識改革
- (4) カリキュラム（教育課程）の再編成

学習プリントの  
工夫  
(例) 方法面への  
ヒント,  
教科通信

学習プリントと  
対面授業との  
連携強化

外部サイトの  
利用  
(例: EVRI  
挑戦状)

教員主導での  
「遠隔」「対面」  
を組み合わせたカリキュラム  
計画の作成

# 3. 各フェーズの課題と乗り越え方の特色

フェーズ0.xから1.xへの移行を模索(4名)

- (1) 子ども-子ども, 教師同士の関係づくりの難しさ
- (2) オンラインツールに慣れていない教師・子ども

代替ツールの  
整備(電話)

組織的対応の  
基盤づくり  
(教員研修,  
教員のLINE  
グループ)

動画の  
作成や提供

Google  
Classroomで  
の相互交流



# 3. 各フェーズの課題と乗り越え方の特色

フェーズ1.xから2.xへの移行を模索(3名)

- (1) オンラインで未修の内容をどう指導・支援するか?
- (2) 双方向的な授業をどう担保するか?
- (3) オンラインでフィードバック(評価)をどうするか?

教科で  
連携した対応  
(動画の作成や  
共有など)

Formsを使った  
アンケート集計  
→フィードバック

動画提供からの  
脱却  
→Google  
Classroomでの  
相互交流

# 3. 各フェーズの課題と乗り越え方の特色

## 1. 共通した課題

- (1) 「人間関係の構築の難しさ (子ども-子ども, 子ども-教師, 教師-教師)」があった
- (2) ただし, 各フェーズにおける対応には違いが  
→ 学習プリント・教科通信 (フェーズ0.x), Google Classroomなどによる交流 (フェーズ1.x, 2.x)

※即時性に差?

## 2. フェーズごとに異なる課題

- (1) 教育課程の抜本的な再編成 (フェーズ0.xのみ)  
⇔ 「通常の時間割通りの授業ができた」 (フェーズ2.x)
- (2) オンラインにどのように慣れるか? (フェーズ1.xのみ)  
→ 代替ツール, 全員参加の教員研修の重要性

※一旦オンラインを整えたと教育課程の再編成の負担が少ない?

# 4. 対応の意義, 残された課題

## 意義

- 教員間の連携が深まった: 「学校」として取り組む (全体)
- 「授業」観の振り返り: 家庭と学校との連携 (全体)
- 大学との繋がりができた (挑戦状シリーズ)
- 子どもの個のニーズに気付く (フェーズ2)  
→ オンラインの良さに気付く

## 課題

- 生徒の学びの差への対応 (全体)
- 遠隔と対面の調整をどのように行うか, カリキュラムの見直しの必要性 (全体)

# 5. 小括

1. 人間関係の構築や相互交流, 子どもの差は共通課題  
フェーズによる違い; 即時対応は不可能 (フェーズ0.x)  
⇔ 共通プラットフォームを活用した対応も可能に (フェーズ1.x~)

## 2. 教育課程の再編成の問題

フェーズによる違い; フェーズ0.xは, 根本的な内容面にまで  
踏み込んだ再編が必要に

## 3. 教員同士の連携の重要性

教科同士での動画作成・共有, スキルの教え合い

※コロナ自体への対応

例) K先生: 子どものコロナに対する偏見への取り組み

# 6. 今後に向けて：コロナに どう向き合うか？

## 1. 「授業」観の問い直し

教師、保護者、子どもも含めて、「教室で行うもの」＝「授業」という意識を見直していく。

## 2. カリキュラムの再編成

1. を踏まえた上で、遠隔・対面を組み合わせたものをカリキュラムとする必要がある。子どもの視点（達成したカリキュラム）の見直しも重要。

## 3. オンラインプラットフォームの充実

子どものケアや相互交流の可能性が広がる。デバイス・プラットフォームだけではなく、使う側の意識改革も必要（参考：ICT教育におけるSAMRモデル）。

## 4. コロナ自体への対応

例) K先生：子どものコロナに対する偏見への取り組み

# SAMR モデルに基づく ICT 導入の検討

段階		ICT を用いた学級経営の例	ICT を用いた授業の例	自校の状況
ICT で学習自体が変容する段階 変換 (Transformation)	再定義 Redefinition 【以前はできなかった新しい実践ができる】	ICT の特性をフル活用し、従来の学級運営では実現できなかった交流を生み出す。	ICT の特性をフル活用し、従来の学習では実現できなかった学びを生み出す。	※自校の状況や時期的な見通しを記入し、職員間の共通理解をはかる。
	変形 Modification 【実践を再設計できる】	先生は生徒に考えさせる時間を確保するために事前に情報を配信するなど、生徒同士の学び合いが起こりやすいように環境の再設計を行う。	自分の苦手分野、必要な教材を生徒が自覚的に学ぶようになる。学習者がいかに主体的に学習できるか、その環境を再設計する。	
従来の学習で ICT を使う 強化 (Enhancement)	拡大 Augmentation 【従来ツールの代替となり、さらに新たな機能が付与される】	配信された資料に生徒が回答し自分の考えを入力して返答する。先生はそれを集約し、ピックアップして教室で共有する。	生徒の学力に応じた問題レベルのコンテンツが出力される。共同編集機能を用いて意見交換・全体への共有をする。	
	代替 Substitution 【機能的な変更はなく、従来ツールの代替】	紙のプリントを配るのではなく、PDF に変換して生徒端末に配信する。	先生が教える代わりに動画が教えてくれる。同時双方向型の授業を配信する。	



フェーズ2・X  
を越えた  
「新しい教育」



フェーズ2・X  
までの教育

※P氏 (@popocco00) のTwitterより許可を得て引用, 一部加工。